

# 県内の文化財建造物にみる設計手法の紹介 ～ 春日造社殿を中心に(1)～

下 津 健 太 朗

## 要 旨

当組織の所在する和歌山県は、「春日造」の中でも「隅木入り春日造」と称される社殿が多い地域である。その分布が紀北より紀南に多い傾向も、そう容易には整理できない。そこで本稿では、これまで筆者が保存修理事業で関わった春日造社殿を中心に、事業中に確認された（正しくは、確認し切れず中空の状態であった）木部構法の特長などを整理しつつ、今後の修理時の基礎資料をめざす。

## 第1章 春日造社殿における千鳥破風まわりの構成について

### 1. はじめに

和歌山県内の春日造社殿を概観すると、室町時代から桃山時代にかけて建立（再建）された建物では、身舎正面の千鳥破風（以下「千鳥破風」）内の妻飾は豕扱首組の形式が中心となっている。一方で背面の妻飾は、豕扱首形式の他に大瓶束形式も用いられている<sup>(1)</sup>。

この千鳥破風内の妻飾は、時が進み江戸時代の修理において、木連格子や大瓶束形式に置き換えられたものも目立つ。この理由の一つとしては、屋根葺き材の仕様変更等に伴う雨仕舞い対策が考えられる。具体的には、向拝（正面の庇）屋根面の勾配を強めることにより隠れてしまう、千鳥破風内の構えを前方へ移動させる。その改変のしかたも、従来からの妻飾を移設したり、元のままで残しながら前面へ新たに妻飾を追加したもの等、さまざまである。

室町時代末期から桃山時代の建立とされる、東田中神社摂社竹房社(旧・一之宮神社)本殿や西田中神社の羊宮神社本殿（いずれも紀の川市打田所在）では、かつての扱首組の前方に別の妻飾を新たに構えた。羊宮神社本殿では、現在檜皮葺の屋根がかつて板葺きの屋根であった可能性が報告されており、竹房社本殿でも同様の可能性がうかがえる<sup>(2)</sup>。両殿とも、千鳥破風内は背面妻飾と同規模の豕扱首組が用いられていた（図1、2）。

それに対して、紀の川市に東隣するかつらぎ町所在の寶來山神社本殿では、当初の豕扱首組の部材を一部転・再用しながら虹梁・大瓶束形式に改変されていた。以下に、その過程と様相について紹介してみる。



図1 羊宮神社本殿、千鳥破風内の旧妻飾



図2 竹房社本殿千鳥破風内の現妻飾(奥)と旧妻飾



図3 竹房社本殿の向拝小屋組(旧妻飾下方の痕跡)

## 2. 寶來山神社本殿（慶長19年、1614）

寶來山神社は、宝亀4年(773)に和氣清麻呂が八幡宮を勧請したことに始まる、と由緒にある。中世には京都高雄の神護寺領「栲田荘」とされ、近世には高野山との関わりを持つようになった。境内は古代の官道である南海道に面し、社殿後方の築地塀の外には中世からの灌漑水路「文覚井」が通る。

瑞垣内には、一間社春日造・檜皮葺の本殿4殿と、その東西両脇に二間社流造・檜皮葺の摂社が各1殿の計6殿が南面して並び建つ。このうち本殿は、東から第三殿(四之宮)、第一殿(三之宮)、第二殿(二之宮)、第四殿(一之宮)の並びとなる<sup>3)</sup>。天正年間の兵火による焼失後、第一殿と第三殿は折居村、第二殿と第四殿は大藪村、と地元2工匠によって再建された。

まず、本殿の構成に関して考察を与えてみる。身舎正面の中備(臺股)で、社紋である「下がり藤」彫刻の中に東(第三殿)から順に「釈迦如来」「阿弥陀如来」「虚空蔵菩薩」「十一面観音菩薩」を表した梵字を入れる。一方、向拝の中備(臺股)では、東から順に「虎」「卯」「亀(寶來山)」「鶴」の彫刻を飾る(図5、6)。身舎では真言密教(あるいは高雄山神護寺)と大日如来の智徳を組み合わせたかの展開を見せ、向拝では神社名にちなんだ意匠に加えて徳川家への敬意をも併存させた、当社ならではの構成となる<sup>4)</sup>。

当社の本殿は、江戸中期頃(元禄年間か)の修理で千鳥破風内の妻飾を豕扱首形式から虹梁・大瓶束形式へと改変される。平成27～28年度の屋根葺替・塗装・部分修理工事では、昭和46～47年度の解体修理時に第一殿小屋内へ保管された近世期中古の妻飾部材を確認できた(図7～9)。このうち扱首台は当初材(豕扱首形式時のもの)で、正面向かって右(東)寄りで二分され、虹梁・大瓶束形式の妻飾において長手は扱首台として用いられ、短手はさらに縦に半裁して指母屋へと転用されていた。この分割された3部材を組み合わせると、昭和修理で復原された各殿のうち、第二殿の扱首台・壁板であったことも判る。第二殿の扱首組から第一殿の扱首台や第三殿の壁板へと転用されており、この改変が4殿同時に行われたものとも言えるだろう(図8～10)。

以上をふまえて各殿で復原された千鳥破風内妻飾

を比較すると、第一殿・第三殿の扱首棹は1尺3寸3分勾配と第二殿・第四殿の1尺1寸5分勾配よりも強い<sup>5)</sup>。また、第二殿と第四殿は凡そ同寸、第三殿も近い寸法であるのに対し、第一殿は随分と小さい。丹生都比売神社本殿(かつらぎ町、室町～明治時代)では第一殿から第四殿にかけて社殿自体が少しずつ小さくなる、との事例もあるが、寶來山神社本殿の正面構えには工匠の差異だけに収まらない要素も含まれている模様であった。



図4 寶來山神社本殿(摂社東殿の前から西を見る)



図5 同、第一殿正面見上げ(向拝臺股彫刻は「兎」)



(第一殿身舎正面の「藤」↑ ↓ 第三殿向拝の「虎」)



図6 同、臺股脚内彫刻の詳細(彩色は昭和修理時)



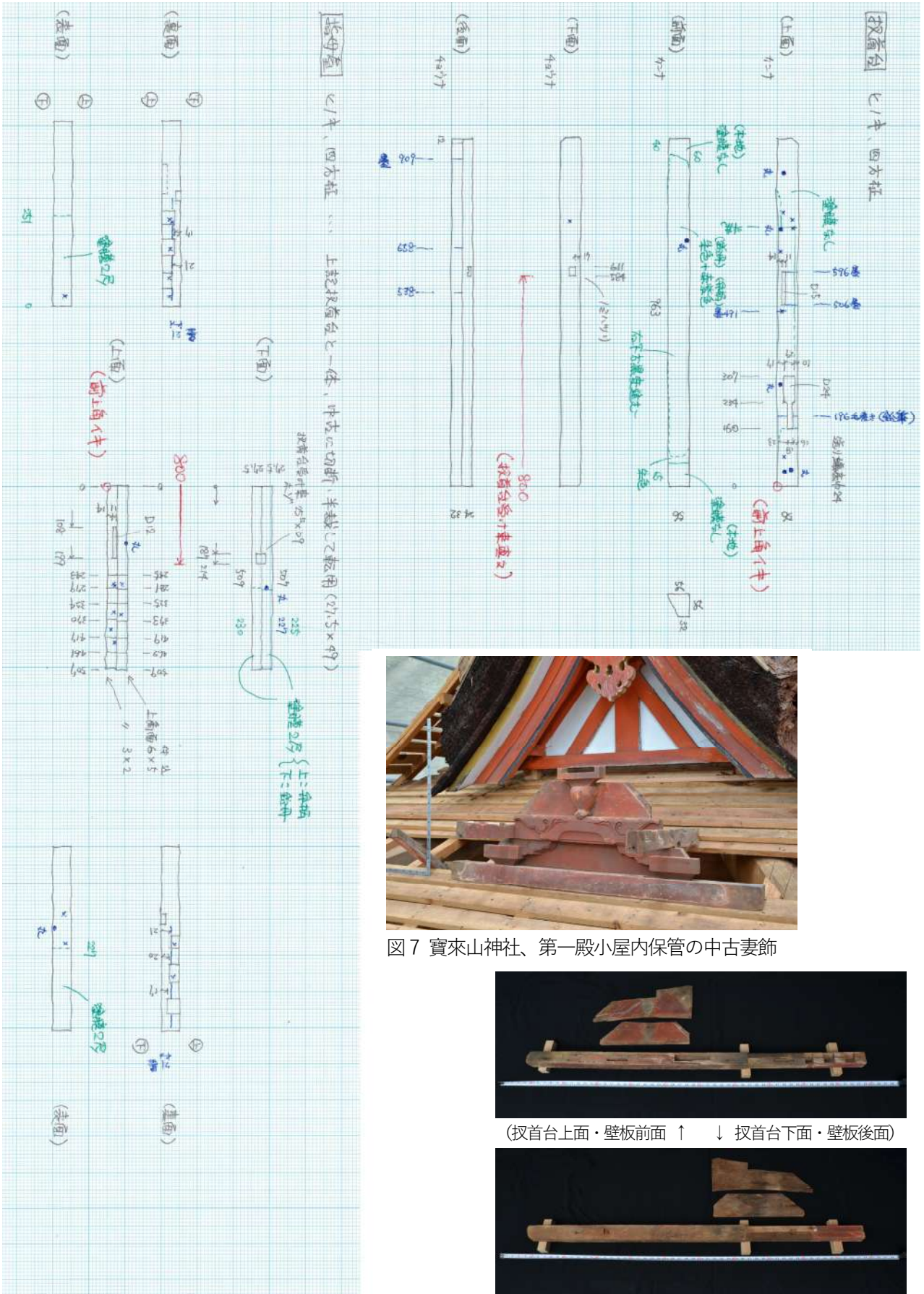


図7 寶來山神社、第一殿小屋内保管の中古妻飾

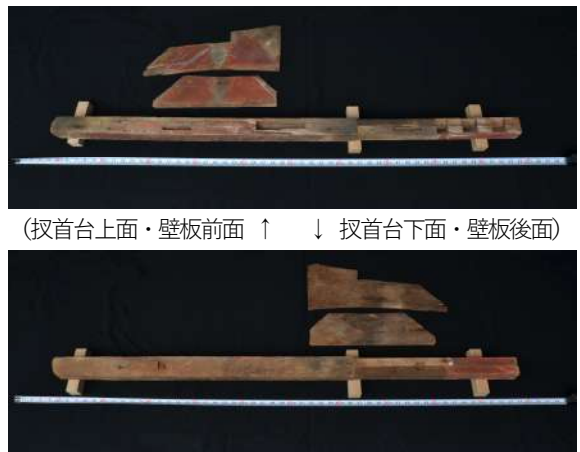


図8 同上、転・再用された当初の扱首台と壁板

図9 寶來山神社、第一殿小屋内保管の当初妻飾部材 (2015 野帳)





(第四殿)



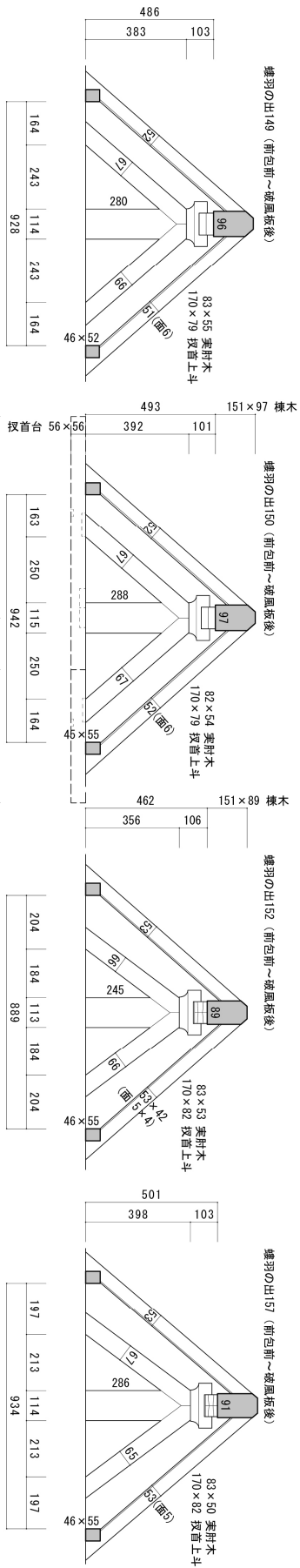
(第二殿)



(第一殿)



(第三殿)



第四殿 (一之宮)

猿田彦大神

卍(十一面観音菩薩)

蟻

第二殿 (二之宮)

菅原大神

クヱ(虚空蔵菩薩)

蟻(寶來山)

第一殿 (三之宮)

八幡大神

クヱ(阿弥陀如来)

卯(徳川宗忠)

第三殿 (四之宮)

大山祇大神

クヱ(釈迦如来)

蟻(徳川家康)

図10 寶來山神社、本殿千鳥破風内妻飾の構成比較 (2023)

## 第2章 春日造社殿の寸法計画について

### 1. 須賀神社本殿（享保4～6年、1719～1721）

みなべ町（旧・南部川村）西本庄にある須賀神社では、令和3～4年度に屋根葺替・塗装・部分修理工事と自動火災報知設備工事を実施した。

須賀神社は平安時代、一条天皇の御代に京都・八坂神社から祇園宮を勧請し、南部荘の総鎮守としたのを創建と伝える。境内北西の一段高い地に、ほぼ同規模



図11 須賀神社本殿（西から見る、手前が第三殿）

の「隅木入り春日造」社殿3棟を東から第一殿、第二殿、第三殿の順に並べて、各殿には素戔鳴尊、櫛稲田姫命、八柱御子神を主祭神として祀る。

### 2. 社殿の寸法計画と全体計画について

修理中、須賀神社の江戸中期再建社殿は、最初に畳（本間）の大きさから内部空間と立面が設定され、続いて縁や軒の出、天井高や棟高などが身舎正面（梁間）の柱間寸法から導かれた可能性が見出せた。同規模の第一殿・第二殿よりやや小振りな（98%）第三殿でも共通し、さらには本殿3棟の配置（各殿の間隔）など全体の計画もまた畳の大きさから押えられることが判った。

詳細は図14～16の通りで、畳の長手寸法、身舎梁間寸法をそれぞれ一辺とした正方形グリッドで平・立・断面のすべてが計画されたものとみられる。同時に、千木・勝男木が正方形グリッドから外れる点も、当地方における近世期の棟形式（千木・勝男木を乗せない）と関わる要素とみなせて、今後の検討課題としたい。

## あとがき（今後を見据えながら）

平成27年度、寶來山神社の保存修理事業で筆者は前半の施工（第一殿・第三殿）に携わり、小屋内の保管古材を確認しつつも昭和46～47年度の解体修理で復原された扱首組との対応まで見出せず、年度末に後半の施工（第二殿・第四殿）へと移行した際には、扱首組の形状にバラツキを感じるままに実測を進めた。その2週間後に紀南へと異動、その後も異動が続いて今年7年ぶりの内勤、偶然当時の野帳に触れて今回の資料整理となる訳だが、当時の認識の甘さ、視野の狭さを見事に実感した。情けなさのなか、当時はなかった資料紹介の場がこうして存在している、ほんとう

に良かった、と安堵の思いで本号に臨んだ次第である。

なお、本紙で取り上げた各社殿は、昭和戦後期以降の保存修理において、小屋組材は更新や整備を受けて来ている。と同時に、かつての屋根形態に関連する部材も、保管に留まらず、更新材を用いて補強・安定させながら再利用されて来っており、まさに生きた教科書群であった。そうした諸先輩方の施工や内包され継承された情報・知見を確りと汲み取りながら、自らも後世に正しく伝えていく一助となれるよう、今後も何かしらの情報発信を続けていこう、との思いのうちに本号での紹介を終える。次回も引き続き春日造社殿にて。

### 【注】

- (1) 金剛峯寺山王院本殿（丹生・高野明神社、大永2年〈1522〉）や有田川町所在の白岩丹生神社本殿（永禄3年〈1560〉）などでは、背面妻飾を虹梁・大瓶束形式に組まれる。
- (2) 扱首台は身舎両側の軒桁に渡す。軒桁木口に野垂木または野隅木用の仕口、扱首台前面中央には旧野地の掛け材も残る（図3）。
- (3) 社殿の呼称は現在のもので、各殿部材に残る墨書で確認される旧呼称を括弧内に併記した。図10でも同様。
- (4) 初代・家康は寅年、2代・秀忠は卯年の生まれ。高野山・徳川家霊台（寛永20年、1643）でも同様の意匠が採用されている。
- (5) 背面妻飾の扱首組は千鳥破風内妻飾よりも一回り大きく、扱首棹の勾配は第一殿・第三殿で1尺1寸、第二殿・第四殿で1尺2寸。

### 【参考引用文献】

昭和47年「重要文化財 寶來山神社本殿 修理工事報告書」

平成6年「和歌山県指定文化財 西田中神社 羊宮神社本殿・八幡神社本殿 修理工事報告書」

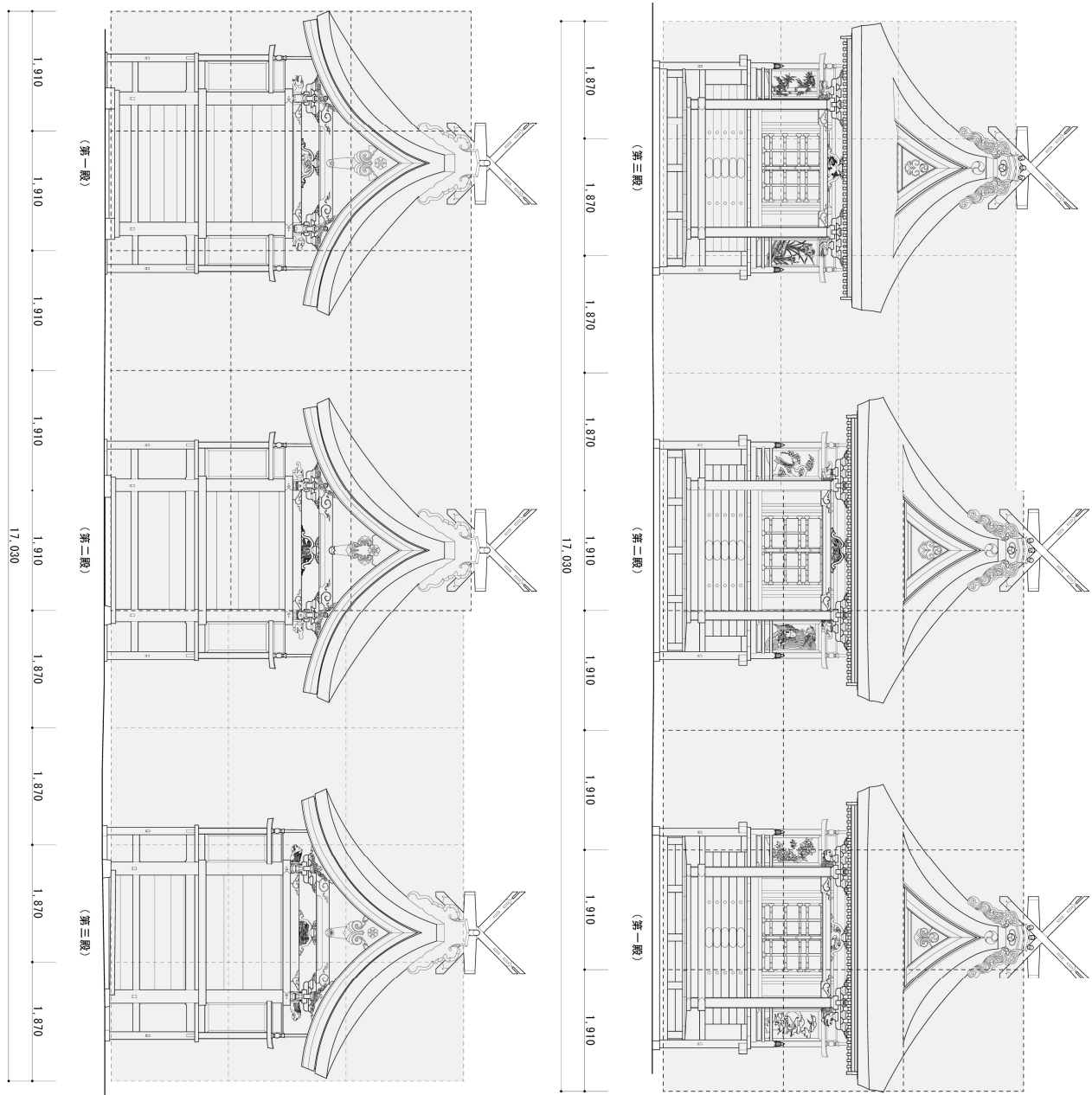




図12 須賀神社、第二殿(右)と第三殿の規模比較

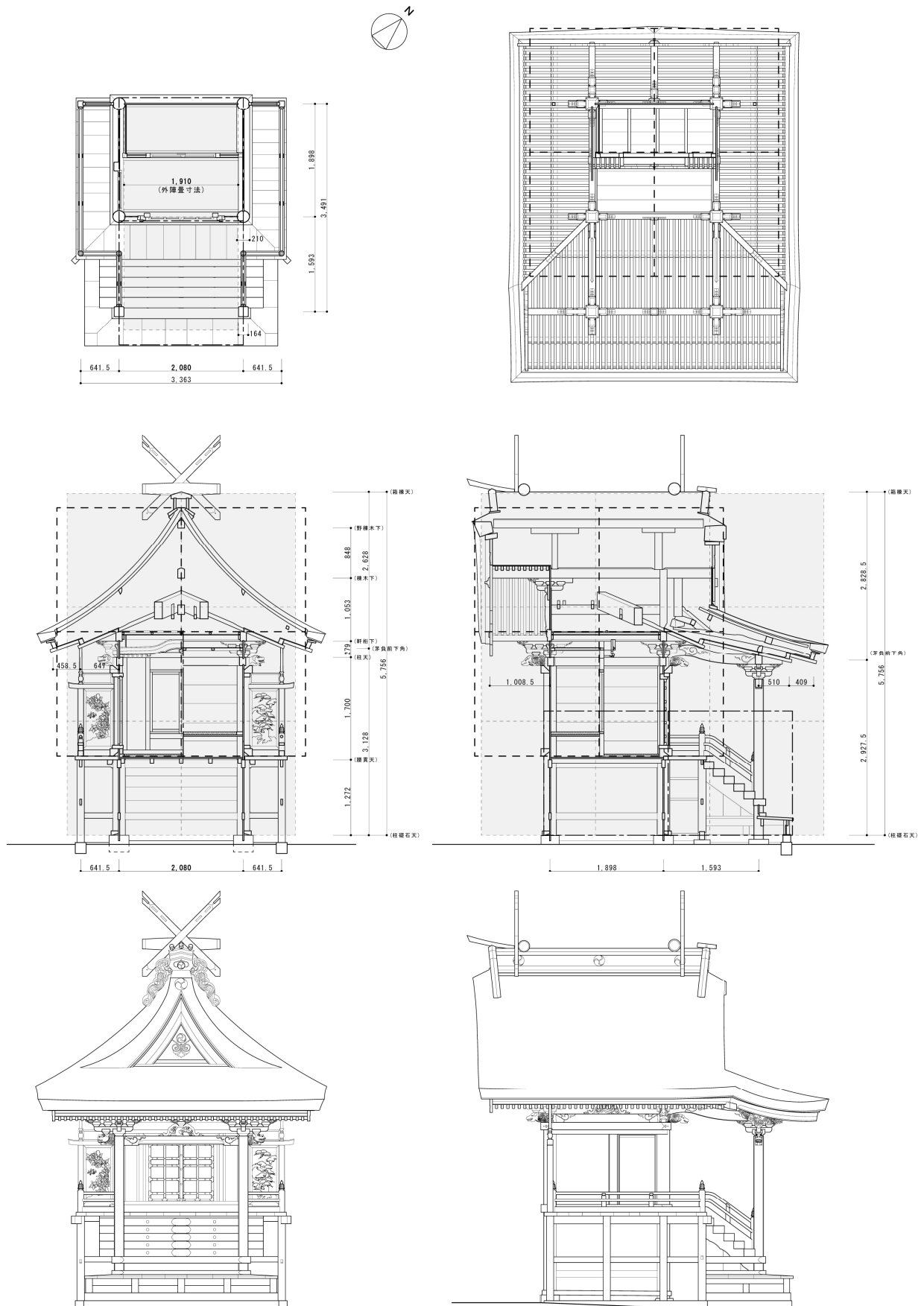


図13 同、第一殿正面(向拝臺彫刻は「梅二鶯」)

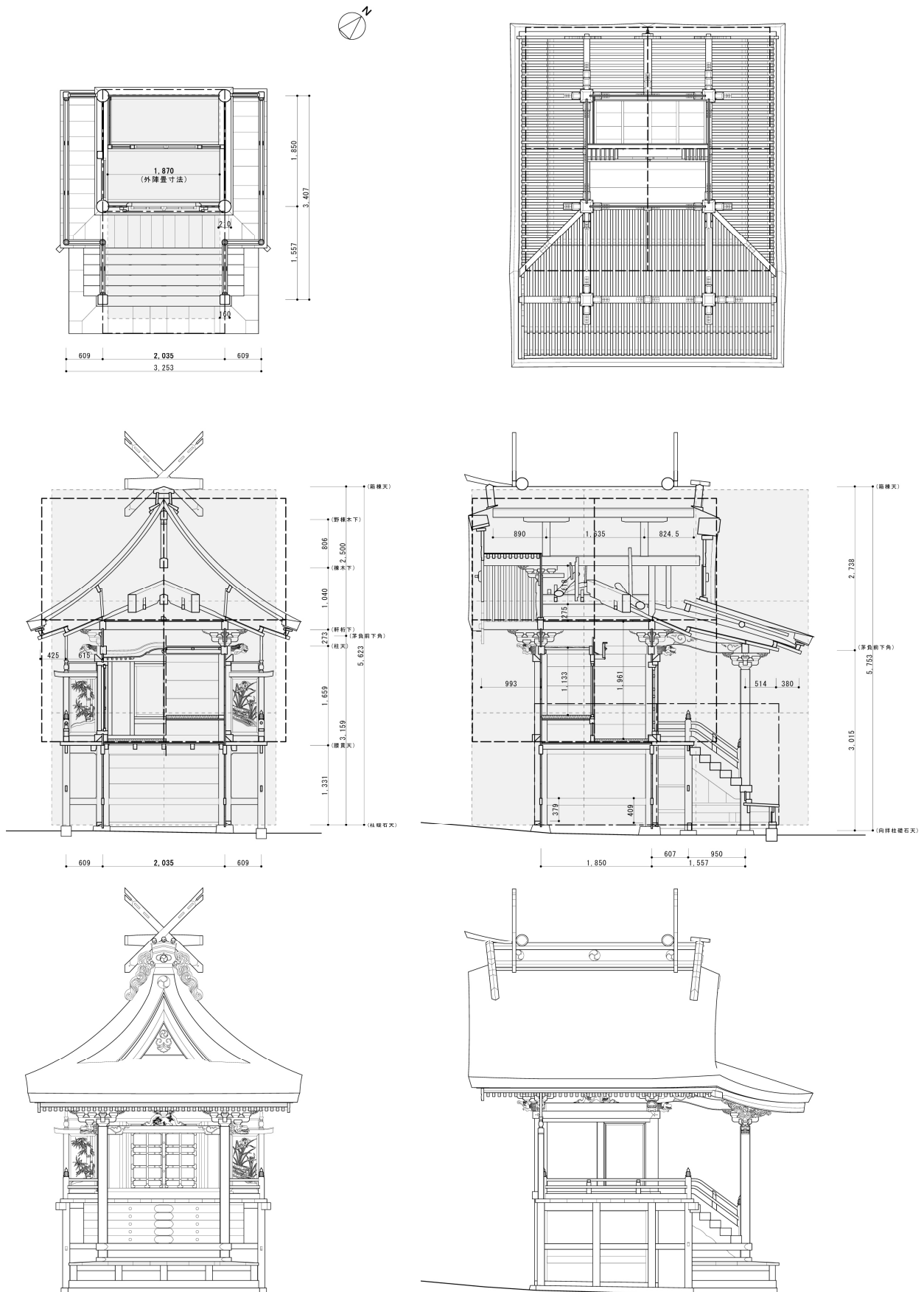


(畳の長手寸法〈第三殿は第一殿・第二殿の98%〉を一辺とした正方形グリッドで社殿の全体が押さえられる)

図14 須賀神社、社殿の全体計画



(網掛：畳の長手寸法を一辺とした正方形、破線2種：身舎正面の柱間真々寸法を一辺とした正方形)  
 図15 須賀神社、第一殿における寸法計画の検討



(網掛：畳の長手寸法を一辺とした正方形、破線2種：身舎正面の柱間真々寸法を一辺とした正方形)  
 図16 須賀神社、第三殿における寸法計画の検討